

## 金子幸代氏の講義と富山関係の業績

今村 郁夫

富山文学の会を設立した金子幸代氏は、富山大学人文学部教授として、学部生および人文科学研究科の大学院生に比較文学の講義を行っていた。筆者も学部から修士修了までの二〇〇四〜二〇〇九年度に教えを受けた。金子氏の講義や主な富山関係の業績について、簡単に紹介したい（講義名は筆者受講当時）。

## 学生の自主性を養成

金子氏が主に担当していたのは、比較文学概論、比較文学講読、比較文学演習、比較文化実習などである。

概論では、森鷗外や夏目漱石、小泉八雲、永井荷風、芥川龍之介、太宰治ら作家をはじめ、映画、アニメなどを取り上げ、比較文学の視点からどのような研究ができるか概説した。受講生にはおすすめの本を紹介してもらうなど学生参加型の講義だった。

講読は、主に鷗外の作品を取り上げ、受講生が調査・研究し、成果を発表する形式で、作品へのアプローチ方法を教授した。二〇〇七年からは、鷗外が海外新聞記事を紹介した『椋鳥通信』に書かれている記事を分類し、当時の時代背景とも絡めながら読み解くことも行った。

演習は通年で開講され、前期には受講生が作品を研究するための文学理論をまず学び、それを実際の作品で実践した。後期になると、主に鷗外の戯曲や翻訳戯曲を題材に演劇の上演に取り組んだ。演劇は脚本や衣装、大道具・小道具など全て受講生が準備する本格的なものだった。もともとは『演芸画報』という雑誌の劇評研究に端を発しているが、上演という形をとることで、当時の時代背景や登場人物の心情、せりふの意味などの理解を深めていった。

実習では、富山の女性作家、小寺菊子の作品研究を進めた。各作品の解題作りや掲載雑誌の調査をはじめ、作品研究を通しておすすめの作品を選出した。成果として、計約二〇〇〇ページに小説と随筆五〇作品を収めた『小寺（尾島）菊子選集』（全六巻）（二〇一〇年三月）を制作した。

講読や演習、実習といったゼミ形式の授業では学期末に、受講生がグループで調査・研究し、発表した際のレジュメを冊子にまとめたり、受講生に発表内容を整理したレポートを執筆させたりして、きめ細かにフォローアップを行った。

学外実習では、主に富山県内の美術館や文学館を見学したほか、三月には卒業論文に向けた資料収集も兼ねて東京方面で実習旅行を行った。国立国会図書館や神保町の古書店、森鷗外住居跡（水月ホテル）をはじめ、年によつては横浜まで足を延ばし神奈川近代文学館、日本新聞博物館、鎌倉文学館なども訪れた。

夏と春の長期休業中には、太宰治の研究者や岩波書店の元編集者ら外部から講師を招き、集中講義形式で比較文学特殊講義が開講された。

これら比較文学の専門科目のほか、所属講座のリレール形式の演習である文化環境論演習では、米騒動を扱った。当時の新聞記事や文学作品での描かれ方などを調査して発表する形式で、文献調査という研究の基礎の養成にも力を入れていた。

一年生向けには、前述の概論のほか、国際文化入門、

教養教育の日本文学を担当し、比較文学・比較文化を専門に学ぶ学生以外にも文学研究の面白さを伝えていた。

ちなみに、二〇〇八年度からは『富大比較文学』という機関誌の発行も始めた（二〇一六年度まで。現在は富山大学人文学部近代文学ゼミが第二期を発行中）。主に卒業論文・修士論文の抜粋を掲載した。

### 映画を年間百本

金子氏は文学だけでなく映画にも精通しており、年間百本観ることを目標に映画館に足を運んでいた。映画の映像表現を説いたり、ドキュメンタリーものを題材に現代の社会を考えさせたりする講義も行っていた。金子研究室には、映画やアニメのビデオ・DVDが約三百あり、借りに来た学生と映画談議に花を咲かせることもよくあった。

金子氏と映画の関係では、まちづくりとやまが運営する公設民営のフォルツァ総曲輪を外すことはできない。フォルツァ総曲輪は二〇〇七年二月に開館し、単館系の映画を数多く上映してきた。金子氏は映画監督の山中貞

雄の魅力を解説するトークイベントなど講演を多く行ったほか、演習の講義で上演する演劇を同館のホールで披露し、まちなかのにぎわいに貢献した。加えて、金子研究室ウェブサイト内のコラム日本海詩人日記(文づかひ)で、同館で上映している映画を紹介するなど、富山の映画文化発展に尽力していた。同館は市民に惜しまれつつ、二〇一六年九月から休館している。

## 富山文学振興に尽力

金子氏は富山文学の裾野を広げるのに学外での活動にも力を尽くしており、高志の国文学館の「文学講座」や、文学に親しむ会の講師も務めた。

富山市の郷土史家、故岡本悦子さんの遺族から作品のコピーを譲り受けた小寺菊子関係では、二〇〇九年六月に富山県立図書館でのふるさと文学講演会で「富山の女性文学―小寺菊子の先駆性」と題して講演したほか、富山県と富山大学の連携協力事業のふるさと文学県民講座で、「富山の女性文学の先駆者・小寺菊子を読む」「富山の女性作家・小寺菊子の生き方を読む」の講義を行った。

さらに、二〇一四年一月には、桂書房から『小寺菊子作品集』(全三巻)を刊行した。A5判、総ページ数約一五〇〇で、九〇作品が収録されている。

## 学生思いの教授

ところで、筆者が金子氏に教えを受けていた前後の二〇〇五〜二〇一〇年の間に、筆者も含め六人が大学院に進学している。一学年が約五人の小規模なゼミでこれだけの人数が進学しているのは、研究だけでなく教育にも力を入れていたことを物語っていると思う。

最後に、金子氏の印象的な言葉を一つ紹介したい。「今やっていることは無駄ではない。確実に力になっている」という趣旨のことをゼミ生に常々言っていた。筆者も仕事をできるようになった今、そう感じる事が多くあり、金子氏の学生思いを表す言葉だと思っている。